

統語論から語用論へ

From Syntax to Pragmatics

内 田 恵

Megumi UCHIDA

（平成 17 年 9 月 30 日受理）

0. はじめに

20 世紀の言語研究は、大きなうねりを伴って 21 世紀へ引き継がれた。まず現代英語の伝統文法を中心とする規範文法研究から、未開言語の調査に威力を発揮した記述言語学あるいは構造主義言語学という調査型言語学への広がりが 1 つめのうねりであった。そして 2 つめのうねりとして、20 世紀半ばにチョムスキーによって生成文法理論時代の幕が開けられた。それは「言語を調査する」ということから「言語を科学する」という発想への大転換を意味している。「科学する」ためには、議論の精緻化と普遍性の追究が常に要求された。そして活発な議論が積み重ねられて、そのたびに修正が幾度となく施されてきた。

「科学」には、実在する事物やその変化を目で見て観察して追究する「実験科学」と、心理的実在を仮定して捨象と理想化の上に成立する「経験科学」がある。後者に属す生成文法理論は統語論研究を中心に据えて、幾度となく理論変遷をしてめざましい成果を上げてきた。特に言語習得研究のみならず、その過程で開発された構文論や複数の言語にまたがる原理や原則の解明は画期的な研究結果をもたらしている。

ある理論が整備されて安定期に入ると、さらなる発展的研究が盛んになると同時に、根本的な再考や変革をしたくなるものである。それは「統語論重視の生成文法理論では言語の本質の 1 つである意味の研究にどう取り組むのか」、「言語の習得と同時に言語の運用面の研究も絶対に必要である」などの声に反映された。このような要請に正面から取り組んでいるのが、意味論や語用論である。

意味論や語用論の研究は、もちろん生成文法が誕生してくる前から行われていた。しかし、20 世紀後半の研究は「科学的」という手法を意識している点に先行研究との相違点がある。どこかに統語論を意識した研究でもある。そしてもう 1 つは意味論、語用論、統語論の相互関連性の重視である。何を中心や機軸にするかにより立場は異なるものの、情報交換手段の著しい進歩に伴い相互に文献を採り入れ、よりよい理論への変革は進んでいる。ボーダレスの時代に言語学も突入してきた。本稿では、語用論研究が 20 世紀後半から 21 世紀にかけて、なぜ脚光をあびるようになってきたかについて、まずそのルーツを求めて言語学の世界を上空から眺めてゆくことにしよう。1 節では言語学がカバーする守備範囲について整理をする。2 節では科学的な態度で言語現象を追究するということを解説する。3 節では生成文法の本質と思考法を考える。4 節では認知言語学の視点からの、意味中心の言語研究を紹介する。5 節では 3 節や 4 節を踏まえて、語用論研究の必要性について議論する。

1. 言語学の守備範囲

「言語」と「言語学」という単語から、それぞれ何が思い浮かぶだろうか。「言語」とは「普段の生活で

しゃべることば」であり、「言語学」とは「言語について、議論する学問である」という答は簡単に出てくるかもしれない。しかしながらどちらもその中身は「幅」が広く、「奥行き」の深いものである。そして「言語」と「言語学」は当然有機的に結びついている。

まず「言語の幅」とは世界各地で話されたり書物に残されたりしている数限りない言語の種類のことを指すとしてしよう。われわれが日常しゃべる日本語に始まり英語、フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、朝鮮語、ロシア語など日本で比較的容易に学ぶことのできる言語から、アフリカ、アジアをはじめ一部族にしかわからないような言語までさまざまである。日常生活に目を移せば、一定のコミュニティ独特の方言なども「言語の幅」を構成する一要素と言ってよい。他方「言語の奥行き」とは何かと言うと、現代人が意思伝達をするために、ごく自然に習得して使用している言語は「いつ、どこからやって来たか」というルーツ探求のことと位置づけてみよう。それは人類の歴史の一部をひもとくことにもなり、また生物の進化系統図にも類似したものである。

次に「言語学の幅」とは何かと言えば、言語の幅で前述した要素を研究してゆく方法論の種類である。個別言語の特徴をとらえたものとして表面的な規則（すなわち文法）について解明したり、どの言語がどの地域で話されるようになってきたか、あるいはどんな階級の人々によって使用されているかなどの特徴をさぐるなどの研究をさす。他方、ここで言う「言語学の奥行き」とは二種類の「言語学」を意味する。1つは、英語の歴史の変遷を探って言語の系統図を調査研究したり、時代ごとの英語のそのものの表面的特徴を研究する分野、もう1つは言語の中に潜む見えない構造や特徴を探り出す研究分野であろう。このような基本的研究精神を反映して、さまざまな下位分野の研究が実際に起こってきた。日本では前者に *Philology*、後者に *Linguistics* という英語があてがわれ、両方とも「言語学」という名に翻訳されている。このような背景を元に言語研究すなわち言語学の守備範囲を細分化してみよう。

- (1) 社会言語学：方言研究、階級別使用英語研究、言い回し（ていねい表現など）研究、俗語研究など
 対照言語学：個別言語の比較研究、未開言語の聞き取り研究など
 史的言語学：英語の歴史研究、文献学、語彙論
- (2) 理論言語学：言語習得研究、英語構文論研究、
 応用言語学：英語教授法研究

(1) と (2) に上げた6種類の言語学について、おおざっぱな概観を述べておこう。

「社会言語学」とは「言語と社会との関係の究明」を目標にした言語学であり、社会階級や社会状況に基づく方言 (*class dialect*) や地理的位置に基づく方言 (*regional dialect*) などが典型的なものである。俗語 (*slang*) は階級方言の一例として扱われることもある。また、方言は二言語併用社会などでは一方の言語が他方の言語に干渉することがある。

次に、ここで言う「対照言語学」とは「複数にまたがって言語の類似点や相違点を探究する言語学」を意味する。1つは「未開・未知の言語の聞き取り調査を主体に、規則性を発見し確立する」記述言語学とも呼ばれる分野をさす。この作業工程では、おのずとして携わる研究者が使う言語の文法が暗黙のうちに比較参考にされている。その意味で「対照」的である。もう1つは、例えば日本語と英語あるいはスペイン語などのように二種類以上の言語の持つ構文特性や文法規則を比較しながら、そこに共通点と相違点を明らかにしてゆくという言語学である。言語系統的に類似した言語の文法を比較検討したものには、20世紀前半のイエスベルセンに代表されるような「伝統文法」の研究がある。さらに生成文法が開発されるようになると、複数の言語間に内在する共通規則性に目を向けて、その特徴を明らかにしようとする傾向

が強くなってきた。

「史的言語学」とは英語を時代の流れに沿って「通時的」に研究する言語学のことを言う。言語の変遷には社会の歴史的变化が大きく関わることが多い。英語もその顕著な姿を持つ。古英語 (Old English)、中英語 (Middle English)、近代英語 (Modern English)、現代英語 (Present day English) という英語そのものの変遷の原動力としては侵略をはじめとする歴史的事件があり、また交通網をはじめとする社会的利便性および文化の繁栄が影響している。「英語史」研究は史的言語学の中心であるが、社会、文化、交通通信、文法、語彙などあらゆる側面からの総合的な研究を含む。さらに、語彙的な変遷に注目している研究（「語彙論」）や、発表された書物全般に対して分析をしたもの（「文献学」）も史的研究の重要分野である。特に書物の材料、体裁、成立の事情などを研究する文献学の一分野を「書誌学」と呼ぶことがある。

今まで (1) の分野を概観してきたが、(2) の分野は (1) ほど垣根がなく、かなり入り組んだものである。まず「理論言語学」は生成文法を太い幹にして、そこから派生した分野をすべて統括している (3 節参照)。生成文法研究の究極の目標は「言語の自然習得メカニズムの解明」であるが、その目標へのアプローチは、これからみてゆく統語論重視か意味論重視かに大別される。また、いずれの立場をとるにせよ、研究過程で（英語、日本語、スペイン語などなどの）個別言語に見られる構文の分析が行われて、驚くほどの新発見が明らかになってきた。そしてさらに (1) の対照言語学の分野へと現在は発展を続けている。

「応用言語学」は人間の心理と言語の使用状況を調べる、「心理言語学」、外国語（すなわち第2言語）の母語（第1言語）への影響を考察して、「外国語教育」へ応用しようとする試み、さらには (1) で見た社会言語学を含めることもある。

このような便宜的に分類した (1) と (2) の特徴を一言で言うと、(1) はいわば「フィールドワーク重視型」の研究分野であり、(2) は「仮定創造型」の研究分野である。別の言い方をすれば、言語の表面のみを見てゆく方法 (1) と、内面まで踏み込んで考察する方法 (2) に大別されることになる。両者は研究手法がかなり異なっているということに注目すべきである。特に (2) の中心的テーマである「言語の中に潜む見えない構造や特徴を探り出す」という目標を達成するには、(1) の研究によく見られる従来のフィールドワーク的手法だけでは困難である。

ただし、(1) と (2) の分野は排他的なものではなく相互に依存しているのも事実である。例えば (2) は単語、句、文の特徴を細かく調べて明らかにしてゆくという観察から出発する。資料をすでに作成された規則集に照らし合わせて、未知の言語の類型的な特徴を解明してゆくことに代表される (1) の方法を継承しているわけである。この方法は言語の内部への探求のみならず外国語として言語を学ぶときにも有意義である。さらに (2) では、フィールドワークの手法で観察された共通点を手がかりに、そのまま完成された言語を分析するだけでなく、言語の表示または習得過程を考察してゆくことを重視しているのが特色である。(1) と (2) の言語学におけるさまざまな下位分野は研究方法も異なっているが、現代の言語学は「科学的手法」を用いることにより発展してきたと言える。そこで次に言語学で言う「科学的」とはいかなるものであるかを (2) の分野を中心に検討してみよう。

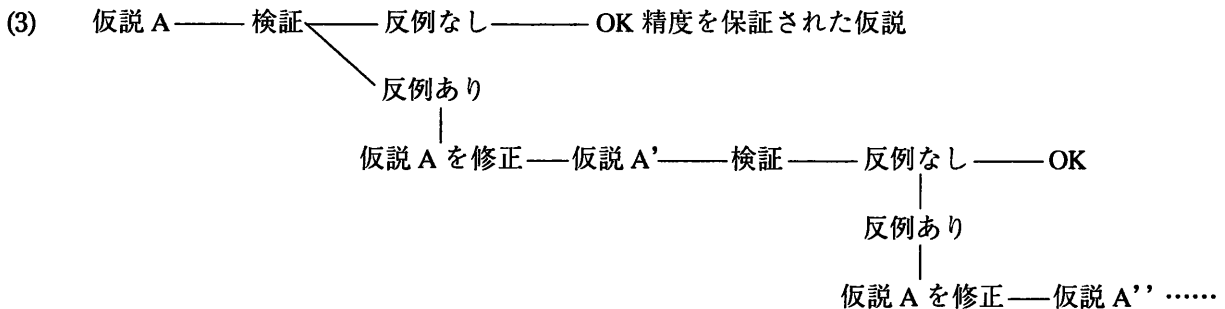
2. 科学的な追究

まずやさしい言い方から入ることにしよう。「科学的」とは「根拠なき感想や意見だけに終わらない」ということを意味する。普段、議論や討論をするときに理由なき発言は支持をされないか、相手にされないかのどちらかの結果に終わることを想像してみよう。言い換えれば、そのような場合にはそもそも議論は成立していないのである。では理由や根拠とはどのようにすれば確固たるものになっていくのか。1つは反対が出にくいということが大事であり、もう1つはあらゆる事象を想定したうえで、よく吟味されていると

ということが必要である。まさにこれが「科学的」と呼ばれる研究手法への入り口である。そしてこの目標に沿った科学には「実験科学」と「経験科学」というものがある。

実験科学とは、実際に目で見て判断できるという可視的な状況で実験をすることから得られるデータを基に、最も真であると考えられる方向へ議論を推進してゆく学問である。これに対して経験科学とは、可視的な状況では実験が不可能であるゆえに、それに代わる方法を用いて最も真であると考えられる方向へ議論を推進してゆく学問である。生物学、化学などは前者を代表する学問分野であり、物理学や論理学などが後者に属すると言えよう。さらに(2)に分類されるほとんどの言語学も後者に属する。ここでは後者の研究方法について、もう少し詳細に見てみよう。

(2)の中でも経験科学の研究方法を顕著に取り入れている分野は理論言語学である。その1つであるChomsky(1957)が提唱した生成文法理論は、「人間が教えを受けることなく自然に言語を習得するのはなぜか」という問いを解明することを第1目標にかかげている。そして研究手法としては仮説検証型の経験科学的手法を採用している。この手法は従来の言語学研究法にとっては一大革命であったと言っても過言ではない。簡単にまとめれば、「ある仮説Aを立てて、検証をする。反例が出れば仮説を修正してゆき、何も反例が出てこなければ、仮説Aはより正しい説として確立される」という方法論である。これを言語習得理論に応用すると、「一般性のある仮説を提案してその仮説に照らし合わせると処理できない言語現象が出てきた場合には、その説を修正して、より精度の高いものを追究してゆく」という方法である。図示すると(3)のようになる。



ここで仮説そのものの特徴について留意しなければならないことをまとめてみよう。

(4) a. 仮説は反証可能性を持つものでなければならない。

b. 仮説に対する反例が出た場合は、その仮説かその仮説の運用面のどちらかが、あるいは両方とも間違っている可能性がある。

(4a)の「反証可能性」とは、「常に反例や反対の論証が出てくる余地がある」ということを意味している。例えば「三角形の内角をたすと180度である」という説は誰が見ても否定しようがなく、反例は100%存在しない。このような説は公理と呼ばれるが、仮説は公理であってはならない。すなわち100%に近い確からしさを将来持つようになってもその過程では議論の余地をふんだんに残していなければならない。そして(4b)のような場合が生じたら、仮説を修正してあらたな仮説を構築する。この手順を循環的に推進することで、より射程距離のある説が展開されていくが、どこまでいっても仮説である。したがって反証可能性は永久に保持される。(4)を簡単に言えば、「仮説はどこまで行っても仮説であり、常に修正の可能性

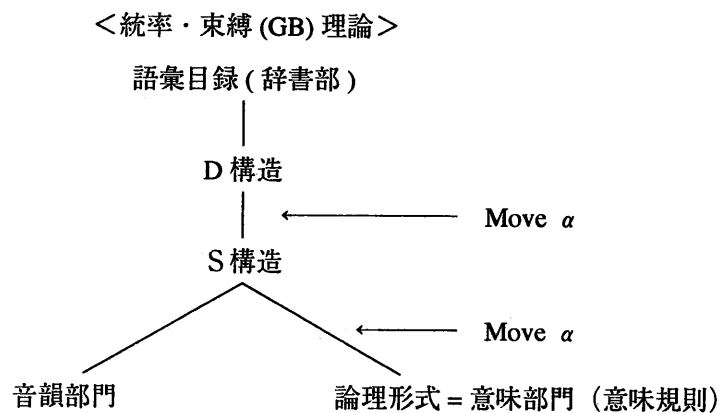
を残している」ということである。なぜならば、可視的に検証することが不可能な分野である以上、常に仮想しながら「確からしさ」を追究してゆくのが宿命だからである。

3. 生成文法の思考法

(3) に示した「仮説と検証」を基軸に研究を進める理論言語学の世界は、いろいろな学派が存在する。しかし中心は生成文法理論であることは誰もが認めるところである。そこで本節では生成文法の特徴と問題点を探ってみよう。

生成文法はその誕生からミニマリストプログラムを中心とした最近の研究まで、「言語の自然習得」のメカニズム解明という壮大な目標に向かって研究が進められてきた。まず、生成文法研究の代表的モデルを見てみよう。

(5)



(5) は 1980 年代の中心的議論である「統率・束縛 (GB) 理論」のモデルであり、その特徴は、1) 統語部門がまず主軸であり、音声部門や意味部門は統語部門からの出力を新たに入力することで維持されるしくみになっている、2) 意味部門は「論理形式 (logical form)」と呼ばれているように、記号論理を利用して客観的な表示を試みているが (すでに指摘されているように) 統語部門の出力をすべて適格に処理できる保障はどこにも存在しない、という点である。前者に対しては統語部門を中心にする根拠を求められ、後者は「意味と語用」面への処理という未解決な問題をいまだ内包している。前者の議論はここでは扱わないこととして、後者について振り返ってみよう。1957 年に生成文法が誕生してから今日まで「意味と語用」の面はいずれ手をつけなければならない分野と認識されながらも、「生成意味論」の研究を除いて体系的な斬新な研究の流れを起すには時間を要した。

次に生成文法の研究は「言語の自然習得メカニズム」についての解明の作業工程において、は「理想化」という大胆な省略法を前提としている。ここで言う理想化とは概略 (5) のようなことを意味している

(6) a. 構文そのものの習得だけを念頭に置いているので、言語使用面の分析は当面後回しにする。

b. 習得にかかる時間的な経緯や、既習の知識を利用しながら行われる習得の中間段階の分析を無視する。

(6) の精神を反映すると、時間軸を無視した自動販売機のような習得モデルが仮定される。まず (6a) 理想化の背景には「人は人種に関係なく、育った生活環境で幼児期に触れた言語を自然に習得する」という事

実がある。さらに、子供は大人の雛形であるので、「大人の使うことばの構文を調べることから、逆に子供がどのようにしてその構文を習得するかの過程を分析しよう」というもくろみも含まれている。言い換えれば、理想的話し手兼聞き手を設定して、どんな人間でも一般的に使用する単一の構文の内部構造解明を優先し、どういう場面で使用されるかという実際には一番ありふれた現象面に言及しないことになる。

しかしながら、このような提案には反論が当然予想される。大人の言語直感の子供の持つ言語直感に比較して、言語運用面の影響をかなり受けやすい。すなわち、ある構文が正しいかどうかを判断するときその基準は微妙になればなるほど、対人関係、言語を使う環境、現在居住する地域の方言などのフィルターがかかってしまう。次の日本語の例を見てみよう。

- (7) A: お久しぶりですね。元気にしていましたか。
 B1: はい、とても元気でした。
 B2: はい、全然元気でした。
 B3: いいえ、全然元気ではありませんでした。

日本語の「全然」は (7-B3) のように否定語に呼応する副詞であるとみなされるが、(7-B2) の答えを (7-B1) と同等に許容する場合が見られる。この例からも大人の文法は子供の文法を反映したものと一概に断言するには問題点を残すように思われる。これは「均一性という理想化」に起因し、現実を超越した仮定である。

次に (6b) の時間軸を考慮しない点について検証してみよう。生成文法では次の「言語習得の瞬時的モデル」が提案されている。

- (8) 第1次言語資料 → 言語習得装置 → 文法

(8) のモデルは (5 歳ぐらいまでの) 子供の習得を想定して作成されている。「第1次言語資料」とは子供の周囲で話されている言語を指し、文法とは習得されたと考えられる当該言語の文法 (規則) を意味している。「言語習得装置」とはここでは人間の脳の言語中枢のことであり、その中には言語習得にまつわる機能が生得的に備わっていると仮定される。このモデルでは前述のとおり時間の流れを捨象している。「周囲で話されている第1次言語資料を入力し、それが刺激となって脳のメカニズムが働き、結果として子供は正しい文法を瞬時にして習得する」ということを示している。

しかしながら (8) では実際には前の段階で獲得した知識を活用しながら行われる言語の自然習得過程を無視していることになる。この過程までも的確に捉えたモデルは (8) のようになると考えられる。

- (9) 段階Ⅰ: 資料 → 言語習得装置 → 文法Ⅰ → 出力Ⅰ
 段階Ⅱ: 資料 → 言語習得装置 → 文法Ⅱ → 出力Ⅱ
 出力Ⅰ → ↑

(9) のモデルでは文法Ⅱの入力として子供の周囲で話していることばに加えて、文法Ⅰの出力すなわち子供自身の発話形式に現れることばも新しい段階の言語習得装置の入力となると考えられている。すなわち子供自身の発話形式に現れることばも新しい段階の言語習得装置の入力になると考えられており、した

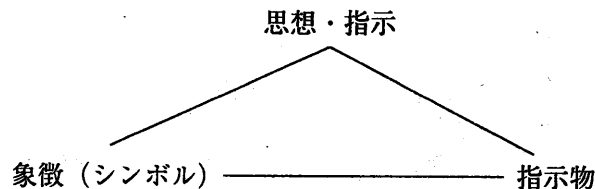
がって習得における時間の経過も考慮される。習得には中間段階の文法を無視することはできないという考え方である。

たしかに生成文法の研究段階で、構文論や言語間の共通性解明という新たな分野が誕生して一定の成果を上げてきた。しかしこのような理想化の考え方を採用することで、結果として言語研究の中に部分的に遅れた分野が生じてしまった。その分野こそが「意味と語用」の研究である。生成文法では LF 部門で意味を明示的に表示する試みがなされてきたが、不十分であることは (6) に関連して議論したとおりである。従来「意味」の世界はあまりにも多面的で、抽象的かつ主観的要素がからむという理由で、科学的研究法からは敬遠されがちでもあった。にもかかわらず、あえて科学的な意味分析を試みているのが認知言語学・認知意味論である。次節ではその特徴を見てゆこう。

4. 認知言語学の思考法

理論言語学の考え方や道具立てを観察すると「形式－機能」、「適格－不適格」、「共時－通時」、「文－文章」など、二項対立的な例がいくつもあることに気がつく。しかしながら意味の世界はどうであろうか。まずオクデン＝リチャーズの「意味の三角形モデル」を使って定義してみよう。

(10)



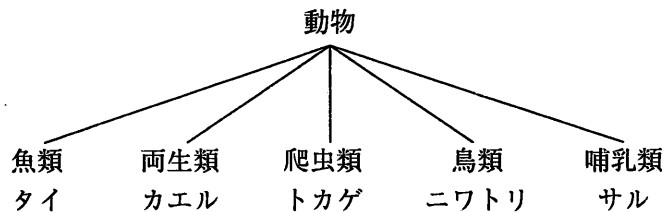
(10) では 1 対 1 の二項対立型ではなく、「指示物」、「思想または指示」、「象徴」の三項が関係する形を採用している。人間の頭脳に存在「思想や指示現象」が、実際の事物（指示物）とそれに対応する言語表現（象徴）の間に介在すると考える。「思想や指示現象」とは言語表現を聞いた人間が想像する対象物である。意味論は統語論に比べて抽象的な研究分野であるとよく言われる。そこで「意味」という単位を、まとまりの大きさを規準に分類してみよう。

まず最小単位である「語の意味」の特徴には次のようなものがある。

- (11) a. 時代変遷に応じて新しい意味が加わることがある。
 (plant: 若枝→植物、carry: 運ぶ→車で運ぶ、scan: 詳しく調べる→走査する)
- b. 特定の意味のニュアンスが変化することがある。
 (holy day > holiday: 聖なる働かない日→働かない日、style: とがった筆→文体)
- c. 同じ意味を複数の単語で示す場合がある。
 (subway, underpass: 地下鉄、mirror, glass: 鏡)

このように変化する意味に対応してゆくためには、範疇ごとに整理しながら意味を理解してゆくという方法が考えられる。

(12)



(12) では上位に位置するものが下位にある範疇を包含している。意味理解あるいは認知作業には (10) のような関係があるにせよ、膨大な指示物の意味を処理するにはどこかで系統的な分類を行っていることは疑いない。これを「厳密下位範疇化」と呼ぶ。(12) において具体的な動物を分類するため細かな類似点や相違点は意味素性を使った分析が有効であろう。さらに哺乳類に属す「人間」の中のさらなる細かな範疇の1つとして (13) の例で調べておこう。

(13) bachelor [+animate, +male, +adult, -married]

(13) では素性分析が±の二項対立を採用していることと、素性の数を増やせば増やすほど、指示物の特徴を正確に把握できるという利点がある。すなわち「動物で、男性で、大人で、結婚していない」人間のことを *bachelor* という英単語で表示していることがわかる。素性分析は、1つの単語が複数の全く異なった意味を持つときにも、より詳細で正確な対応ができる。例えば *bachelor* は (13) の意味のほかに、「学士」という意味がある。この場合は +animate という素性以外は (13) と異なった素性で表示されることになる。

ここまで見てきた「語の意味」の分析を踏まえて、2番目として「文レベルの意味」に目を移してみよう。まず多義語が原因となる曖昧性の問題について日本語と英語の例で考えてみよう。

(14) a. 足をしっかり洗いなさい。

b. 足がついてしまった。

c. 足が地につかない。

(15) あのはしを渡りなさい。

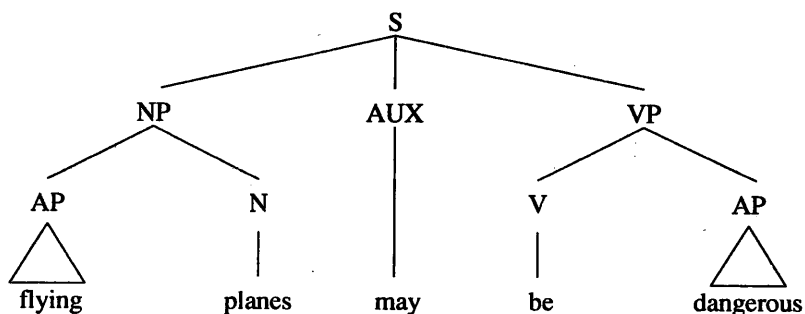
(16) I don't like this article.

(14) の例は「足」という単語が「動物の足」のほかに「業務、職業、悪行」、「足跡、手がかり」、「落ち着き」などの意味があることを示している。特に (14b) と (14c) はかなり似通った文であるが、明らかに意図する足の意味は異なる。どういう状況で使用された文であるかが判明すると曖昧性は解消する。それに対して (15) の「はし」には「橋」、「端」、「箸」と漢字による判断基準がある。したがって発音は同じでも漢字が明らかになれば、曖昧性は解消できる。また音声のみの場合もアクセントの位置が微妙に変化することでの的確な意味への手がかりとなり得る。(16) の英語の例も (15) と同様で、*article* には「論文」、「品物」、「項目」といった意味がある。ただし日本語の漢字に相当する手段がないので、使用された状況から曖昧性を解消してゆくしかない。

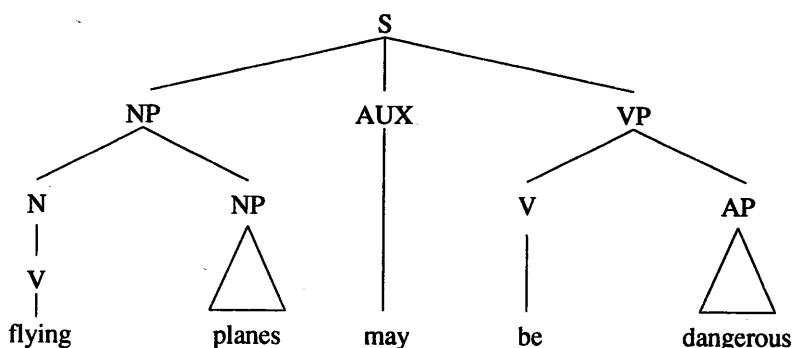
さらに次の (17) では *flying planes* の中身は「飛んでいる飛行機 (現在分詞)」、「飛行機を飛ばすこと (動名詞)」の二種類の意味を持つ。この曖昧性は生成文法の手法を使えば、(25) のような内部構造の相違として明らかにすることができる。

(17) Flying planes may be dangerous.

(18) a.



b.



(18a) は「飛んでいる飛行機」の意味で現在分詞用法を示しているのに対して、(18b) は「飛行機を飛ばすこと」という動名詞用法を明らかにした図である。2 節で扱った生成文法には (18) のような樹形図を使った意味への分析の利点もあるが、意味は論理形式部門で部分的に取り扱われるにすぎず、統語部門に比べて小規模かつ限定的である。少なくとも (14) から (16) までの例を処理するには「意味」中心の分析をする新しいパラダイムが必要であり、まさに認知意味論の研究がそれに答えるものである。

認知意味論は認知言語学の一下位分野のように見えるが、現在のところ認知意味論が認知言語学の中でしめる役割はきわめて大きい。本稿では両者はおよそ等価であると考えていることにより認知言語学という用語に統一する。ここでいう「認知」とはどのようなことを指すのだろうか。山梨 (1995) によれば「認知とは外部世界からの解釈と意味づけ、環境・社会との相互作用を介しての身体的ないしは対人関係的な経験、感性、想像力等を反映する経験的基盤に根ざす広い意味での認知能力を問題とする。」と規定している。これはすなわち「人間が生活するときに接触するさまざまな内外の世界を、どのように感知して行動基準の根源にするか」ということである。「世界」とは範囲が広く、その人間がいる地域の文化や生活様式や思想的背景にまでおよぶ。人間社会では、この認知過程に「言語」の関わる役割がきわめて大きいのは周知の事実である。

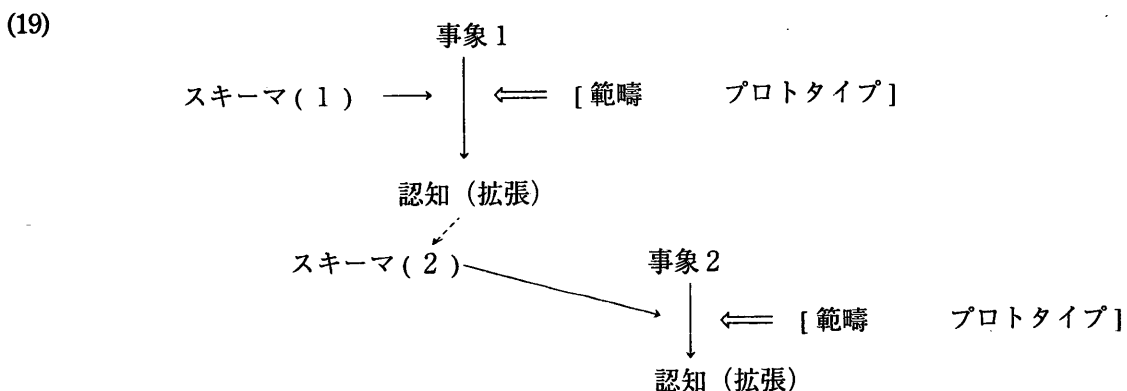
認知言語学のルーツは 1960 年代の生成意味論にさかのぼる。生成意味論は、統語部門ではなく意味部門に生成的な役割を特化してゆく理論である。この理論では、そもそも文の深層構造は意味部門において意味表示として規定される。さらに深層構造の意味表示に語彙の変形操作を加えることにより、表層構造が導かれる。そして文法にかかわる現象一般には、論理構造、推論、発話の力、会話の含意等が関与するという思想が流れているように思われる。このような精神をふまえて認知言語学で提案されている認知のメカニズムを順に概観することにしよう。

まず(12)で扱ったように、共通特徴を持つと認識される集合体を「範疇」と呼び、類似したさまざまなものをひとまとめにすることを「範疇化」または「カテゴリー化」と言う。範疇化された種類を見ると、縦と横の関係が成立する。まず縦は「階層性」を意味する。範疇化するとき最終的に人間の脳の知識として、上から下への包含関係（下位のは上位の部分集合をなす）が成立するようになる。この理屈は認知および記憶ということを考えれば妥当な道筋であり、わかりやすい。他方、横の関係は「どこまで類似点を求めて範疇に含めるか」ということの作業を強いられる。単純な特徴を求める段階での作業は問題ないが、紛らわしいものの判別は横の関係で行われ、それを誤ると間違った認知をすることになる。ただし範疇境界がはっきりしたものとそれほどでもないものによっても、横の関係をどこまで認めていくかが変化したり、問題になったりすることがある。

次に範疇を組み立てる時の糸口となる操作に「プロトタイプ形成」がある。プロトタイプは「ある範疇の中の代表的な事象」を指し、典型あるいはひな型と言える。プロトタイプ形成には横の系列も重要であるが、縦の関係で下位の範疇に対して影響力を持つ。具体的に言うと、プロトタイプはすぐ下位の階層からその典型的な特徴をくみ取る形で形成される。このようにプロトタイプは縦の系列を中心に構成されることがわかる。

再び横の関係をもう少し見てみよう。ある範疇に属している物（事象）が別の範疇に属することが当然起こってくるので、範疇境界はときに破られるように見える。それと同時に確実に同一範疇のメンバー同士の関係はどうなっているのかを整理しておく必要がある。人間の脳では、ひとたび同一範疇に属するという認知が成立したとすると、その成員の中で今度は類似性の強いものと弱いもので距離感が生じてくる。そしてそれらは類似性のネットワークともいべきもので結びつけられている。このネットワークは「らしさ」の追究ということを示唆している。言いかえれば、人間が認識をするときには柔軟性に富んだ抽象的レベルを仮定しなければ説明がつかない。これを「スキーマ」と呼ぶ。スキーマはプロトタイプを基盤に構築されると言って過言ではないだろう。すなわちプロトタイプの特性を分解してゆくと、そこに明らかな必須要素が必ず潜在する。それは形容詞的なことばで表される要素（長いもの、大きいもの、太いものなど）を複合してできあがる一種のイメージのような概念と考えておこう。このスキーマという新たな道具を組み入れることにすると、認知過程における柔軟性と受容性を著しく増大させることができる。素性のようなものでスキーマの中身の共通特徴をくくっていくことにより、おうとつの少ない完全性の高い共通特徴から、不完全ではあるが何とか同じ範疇に組み込めるのではないかという事象・事物までを、瞬時にかつ飛躍的に判別できることになる。

ここまで見てきた認知プロセスについて、具体的に例やモデルを使って見てゆくことにしよう。まず、全体像を次の図で表すことにする。



外界の事象 1 (認知したいもの) が現れたとすると、まず類似品は何かないかということを探す作業を脳で開始する。これは手がかりが皆無の状態からの認知よりも、時間とコスト面ではるかに効率的である。脳に入力されている類似情報の典型であり、探索作業で手がかりとなるものがプロトタイプである。このプロトタイプに事象 1 がある程度一致すれば、事象 1 を認識できたことになる。ひとたび事象 1 が認識されると、プロトタイプと連動してスキーマ 1 にその知識が反映させられる。スキーマとは前述のように「~らしさ」を表すゆるやかな規準である。次に事象 2 を処理する段階になるとプロトタイプと新たにできあがったスキーマ 2 を参考に認知作業が行われる。スキーマは多くの具体例から抽象化して得られる知識であるゆえに、常に拡張や変更を繰り返してゆく可能性を保持している。またプロトタイプに合致しないものは認識できないとすると人間の認知の応用性は説明ができないので、プロトタイプの規準から一見はずれそうな事象をスキーマが正しく認知する方向へ導いてくれる。スキーマはいわばセーフティネットの役目を果たす。

このメカニズム (19) に一例をあてはめてみよう。

(20) 哺乳類： ヒト、サル、イヌ、ネコ、コウモリ、クジラ、イルカ

(12) を参考にすれば、哺乳類とは動物の 1 つの下位類であり、動物は生物の下位類である。人間が意味を認識してゆくときに、どこの類から始めるかは定かではないが、共通特徴を追い求めてグループ化をしてゆくのは事実である (範疇化)。このグループすなわち範疇に所属する具体的な事物や事象の中で典型的な例と一般的に認められるもの ((12) ではイヌやサル)) がプロトタイプとなる。さらに (12) の中には一見したところ哺乳類とは認識しにくいようなコウモリ、クジラ、イルカなどを含んでいる。そこでこれらの哺乳類も含めて総括的なイメージを構築しなければ、実際の事象認知には役立たない。この総括的な概念がスキーマと呼ばれる。したがってスキーマはどうしても抽象的な性質を持つことになる。当然スキーマは人間が経験した過去の事実を基に形成されるので、大人になればなるほど、その容量は広がっていく。人間は未知の外部事象がまずプロトタイプに合致しているかどうか精査をし、そうでない場合はスキーマと照合する。これによりプロトタイプとの類似性の遠近を測ることにより「~らしさ」を査定する。そしてこの操作を繰り返すことで意味を認識すると考えられる。

このように、認知のメカニズムはプロトタイプとの類似性を発見することで範疇を拡張して、その拡張例とプロトタイプとに共通するスキーマを新たに構成することを繰り返してゆく過程が中心である。範疇の拡張を動機づけるものとしてはさまざまな要因があげられるが、字面通りの表現に加えて慣用表現などが関与する場合がある。

5. 認知から語用へ

前節で見てきたように、認知言語学の立場は潜在的な生得性云々よりも、周囲の環境との相互作用の中で活性化される認知的作用に焦点をあてている。したがって言語は人間の持つ記号に関する能力の表面化であり、認知体系がそれを下支えしているという考え方を採用する。そしてこの認知能力を繰り返し作動することにより外界を認識して、認識されたものは「知識」として脳に蓄積される。ひとたび蓄積された知識は、別の類似関連項目の認識のときに呼び起こされて、認知プロセスの円滑化に触媒のように働くのである。

ところでここまで語の意味論や文の意味論に重要な関わりのある認知の方法について見てきたが、実際の言語運用には、談話あるいは文脈というものに関係してくる。談話や文脈があると、(14) から (16) の

多義文の例も簡単に的確な解釈を選択できる場合がある。またメタファー（隠喩）やメトニミー（換喩）は文脈があつてこそ威力を発揮する。さらに方言や独特な言い回しは個別言語に反映され、そこに文化の切り取り方が見え隠れする場合もある。これらはすべて「語用論」の世界に属する研究対象である。生成文法では「統語」、「意味」、「音声」という柱を立てるが（(10)-(13)参照）、

20世紀前半の言語哲学者モリスは外界認識の基礎として「言語」と「表現対象」と「言語活動」の三項は提案している。池上（1991）によればそれぞれ「統語」、「意味」、「語用」に当たる。実際の言語運用で相手の心理への洞察、より完結で的確な情報伝達などを意識した処理が行われていることを考えれば、語用論の重要性は明らかである。語用論の中身を考えると「慣用表現」、「情報構造」、「発話行為」、「会話の公準」、「メタファー（隠喩）」や「メトニミー（換喩）」などという用語が上がってくるが、その前にもっとも日常的な言語の使用に見られる興味深い例から見てゆくことにしよう。

(21) Did you build her house?

(21)は「あなたは彼女の家を建てたのですか」という意味から数種類の曖昧性が生じてくる。「あなた」は家を建てることにどのようにかかわったのか。建築や設計のプロの場合もあれば、資金提供者の場合も想定される。また、「あなた」は彼女にとって親なのかフィアンセなのか、あるいはパトロンなのかなど関係も詮索される。類似したことは「彼女」に対しても当てはまる。このような疑問は談話や文脈が備われば、おそらくいっきに解決されるであろう。さらにもっと深い洞察が関係する例に入ってゆこう。

(22) 今日は4月のわりに寒いね。

(22)を耳にした時に、われわれは2つの事柄を頭に描く。1つは「何かを言う」という純粋な伝達であり、もう1つは伝達に伴う何らかの行動まで期待する場合である。後者の場合は、「いかに言ったことが行われるか」という「行為の遂行」と呼ぶべき観念が「伝達」と言う観念と同様、あるいはそれ以上に重要視される。具体的な状況設定をしてみよう。通例(22)の字面の意味だけでは、その場の状況の描写にすぎず「伝達」という機能しか見えてこない。しかし例えば寒い部屋に入ってきて、ストーブがあるにもかかわらず点火されていない状況を仮定してみよう。さらに(22)を発した話し手より年下の人間がその部屋にいたとすれば、「ストーブをつけて欲しい」ということの要請をしているとも推測できる。

さらに、文には最初から行為をすることを前提にしているタイプもある。

(23) 私はあなたの手伝いをすることを約束するよ。

(23)のように、一定の状況設定によって初めて発話行為文であることが明らかになる文とは異なり、話し手がその構文を発話すると同時に、ある行為が遂行されることが保証されるような場合がある。すなわち相手に約束をするということと同時に、手伝うという行為を保証している。このことは、(23)の例のように、状況に依存しているのではなく「約束する」という動詞が重要な役割を果たしている。

語用論は(21)から(23)の例に科学的に光を当てて分析してゆく研究である。まず(21)は「前提」、「直示」、「情報構造」という分野からのアプローチが必要になってくる。「前提」とは「何を背景にこの文は話されたり書かれたりしているのか」ということを明らかにしてゆく分野で、2人以上の人間が了解するという最小人数の前提から、その発話の裏にある社会的あるいは文化的要因まで関係する遠大な前提もあ

る。「直示」とは主として代名詞の指示関係の研究である。ただし、単純に指示物を指せる場合と、指示物が特定できないのに代名詞を使用している場合、あるいは談話環境や文脈から指示物を特定してゆく場合など何種類もの型が存在する。私たちは相手に自分の言いたいことをわかりやすく伝達するために、文法規則の許す範囲でわかりやすい単語の配列で文を使うことを心がけている。このしくみを分析してゆく研究が「情報構造」という分野である。

(22) や (23) に関しては「発話行為」という分野からの研究が盛んである。一言で「発話行為」と呼んでも中身は細分化されて、そのレベルに応じて発話の意図も変化してくる。また、相手を意識した発話には、常に情報伝達上のマナーが存在しており、普通の状況では無意識にそのマナーを踏襲して伝達が行われている。これが「会話の公準」に代表される一連の原則である。

今まで見てきたように、ある構文あるいは発話が、談話や文脈という一定の環境の中に置かれると、常識を働かせた情報伝達が行われるが、ときにわざとこの常識をくつがえすことで、新たな言外の意味を作り出すことがある。これが「メタファー（隠喩）」や「メトニミー（換喩）」の効果である。一見原則違反に見える言い回しも、ことばのゲームや文学的思考あるいは皮肉と解釈されて、日常の言語使用の幅を飛躍的に拡大している。

6. まとめ

本稿では、生成文法、認知言語学、語用論の特徴について考察してきた。「理想的なことば」から運用面重視の「生きたことば」を分析する方法についての紹介と検討をしたことにもなる。ここで特に3節から5節までに見てきた内容について比較検討をしておこう。

生成文法は「理想的話し手・聞き手」を設定して言語習得のメカニズム解明に力点をおいての研究であった。

- (24) a. 言語の知識とは何であるのか
 b. 言語の知識とは、どのようなメカニズムで獲得されるのか。
 c. 言語の知識はどのようにして運用されるのか。

チョムスキーは本来 (24) に示した3つの問いの解答を求めてゆくことから生成文法の研究を開始したが、現実には並行的に開発が進んでいるわけではないことを見てきた。均一性と理想化のもとに運用面に関する人間のおりなす発話の技術や心理的作用というものは捨象されてきた。さらに「言語の意味」の持つ深遠な内容には言及することを避けてきた。「言語の自然習得解明」という目標へのアプローチとしては正しいと言えるかもしれない。しかし生成文法の枠組みに関する節目となるモデル (5) を見ても明らかのように、意味との関係は無視できない。

認知言語学の場合はどうであろうか。「言語習得＋構文解析」という研究方法を採用している生成文法とは対称的に、認知言語学は「外部の世界の認識コード形成＋認識拡張」という主旨の研究である。すなわち人間が言語を操れるようになる過程を、統語中心のアプローチをするのではなくて、語の意味の習得から構文へ分析を拡張してゆく。建築方法に例えてみよう。生成文法がまず枠を作って中身をそろえるトップダウン型とすれば、認知言語学は中身をどんどん増やし入れ物を何にしようか考えるボトムアップ型とみなすことができる。さらに研究手法の根底にあるは「時間」の流れを生成文法は無視するのに対して、認知言語学はきわめて重視しているという点で隔たりがある。以上のことを簡潔にまとめると (25) のようになる。

- (25) a. 生成文法が言語能力の普遍的部分の解明を究極目標に定めているが、認知言語学は「認知」というプロセスの唯一性のみに着目する。
- b. 認知言語学では同一文化圏で生活する人間が切り取る外界の切り取り方とその産物を言語を用いて分類をするので、生成文法で見た過度の理想化を行わない。
- c. 生成文法は「言語の自然習得メカニズムの解明」という目標へアプローチするさいに、(5歳ぐらいまでの) 子供を研究するための方法論として成人の文法を対象にしているのに対して、認知言語学では年齢などは考慮しないし、また習得メカニズムの解明を特筆すべきテーマとしない。
- d. 生成文法は統語論を中心に据えて語彙や意味を取り扱うが、認知言語学では文法にかかわる現象は、意味的な要因や語用論的要因によって動機づけられる。

このように考えると、認知言語学は文産出と構文使用というインプットとアウトプットの両面で、生成文法とは異なった精神を持つことがわかる。

生成文法も認知言語学も、程度の差はあるにせよ「形式」を重視しているのに対して、具体的な文脈や談話で用いられる言語表現に着目した研究が「語用論」である。「あることを言いながら、別のことを意図している」という行為は頻繁に行われている。そしてこのよう行為の遂行者は小さな子供ではなく大人に極端に偏るであろう。その理由は人間としての総合的な知識を身につけて、多面的な言語使用環境にさらされて、自然とそのような知恵を身につけているからである。「大人は子供の元祖コピーである」とする考え方は当然通用しないことになる。しかし、それでは「あることを言いながら、別のことを意図している」事例をたくさん収集することだけが語用論研究であるとする発想は「科学」としての体をなさない。やはりそこには、先行研究の優れた点も採り入れていく必要や、異なった研究であっても、そこから出てきた優れた知見を補完的に採用してゆく姿勢が大事である。

語用論の境界線をどこに定めるかは議論の余地を残すところだが、今日にいたるまでこの分野の議論における中心的なテーマは、「構文の機能から語用へ」という方向と「語用から構文機能へ」という二方向があるように思われる。前者は情報構造理論を中心とした研究であり、Birner and Ward(1998) や Kuno(1987) などが代表である。他方後者は Grice(1975) を基本に Levinson(1983) に始まり、関連性理論研究にまで広がる。また、言語の背景にある「文化」ということまで射程に入れて社会言語学的に言語を分析している立場に Halliday(1985) がある。言うまでもなく、「機能」と「語用」ということは共通部分を持って捉えられることが多い。語用論研究に必須となる知識を整理しながら、提唱されているいくつかの理論について特徴を、別の機会に述べてみたい。

参考文献

- Birner, B. and G. Ward (1998) *Information Status and Noncanonical Word Order in English*, John Benjamins, Amsterdam.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Cole P. and J.L.Morgan (1975) *Syntax and Semantics*, Vol 3: Speech Acts. Academic Press, New York.
- Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation," in Cole and Morgan eds., 41-58.
- Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Edward Arnold, London.
- Ikegami, Y. (池上嘉彦) (1991) 『英文法を考える』筑摩書房, 東京.
- Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax*, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Lakoff, G. (1987) *Womens, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Levinson, S. (1983) *Pragmatics*, Cambridge Univ. Press, Cambridge
- Yamanashi, M. (山梨正明) (1995) 『認知文法論』ひつじ書房, 東京.